

二種の求め

世尊が祇園精舎にいられた時のことであります。世尊は早朝から衣をつけ鉢を持って舎衛城に托鉢に出かけられました。時に多くの比丘たちは尊者阿難に近づいて言いました。「阿難よ。私達は先に世尊のお口づからの御説法を聞いたことであるが、今また世尊のお口づからの御説法を聞くことが出来るならば誠に結構であります。」と。

すると尊者阿難は言いました。「では羅摩婆羅門の庵室に行くがよい。恐らく世尊の御説法を親しく聞くことが出来るであろう。」

かくて世尊は舎衛城に托鉢に行かれましたが、その日の夕方、阿難は世尊の御供をして羅摩婆羅門の庵室へと近づいて行かれました。その時多くの比丘たちは、世尊の御説法を聞くために集っていましたが、世尊は門口の小屋に立ちながら話の終るのを待つて戸をたたき給うたので、比丘たちは戸をあけて世尊を庵室にお入れしました。座につかれた世尊は、比丘たちに問われた。

「比丘等よ。どんな話があつてここに集つたのであるか。今何を話していたのであるか。」

すると比丘たちは、
「世尊よ。世尊についての法の話が始まつていたのでありますが、そこへ世尊がお見えになつたのであります。」

「比丘等よ。それはよいことである。比丘等が法の話のために集るということは、出家の生活に、汝等に適しいことである。比丘等よ。汝らが俱に集るときには、二つになすべきことがある。それは、法の話をするか、聖なる沈黙を守るかである。」

比丘等よ。求めるといふことに二種ある。聖求と非聖求とである。非聖求とは何であるか。

比丘等よ。非聖求とは、自らは生あるものでありながら生あるもののみを求め、自らは老いるものでありながら老いるもののみを求め、自らは病あるものでありながら病あるもののみを求め、自らは死の愁ひあるものでありながら死の愁ひあるもののみを求め、自らは穢れあるものでありながら、穢れあるもののみを求めている。

比丘等よ。生あるもの、老あるもの、病あるもの、死あるもの、穢れあるもの、とは何であるか。比丘らよ。妻子、奴婢、羊、山羊、鶏、豚、象、牛、馬、金銀はいづれも生あり、老病死あるものである。比丘らよ。これらのものに囚われ、迷い、溺れて、自ら愁いあるもの穢れあるものでありながら、愁いあるもの穢れあるもののみを求めているのである。これを非聖求と云うのである。

比丘らよ。聖求とは何であるか。比丘らよ。自らは生あるものであつて、生あるものは禍と知つて、不生なる安穩の涅槃を求め、自ら老あるもの病あるもの死あるもの愁いあるもの穢れあるものであつて、それらのあるものは禍と知つて、老いることなく病むことなく死ぬることなく、愁いなく穢れない無上安穩なる涅槃を求める、これを聖求と云うのである。」

と説かれました。(維摩經)